

ヴェイリ・ブラント首相候補の誕生

安野正明

1 はじめに

ドイツ社会民主党（SPD）は一九六三年に結党一〇〇年の記念式典を開催した。戦後のSPDが自らの誕生の年をアイゼナハ綱領採択によつて社会民主主義労働者党（アイゼナハ派）が結成された一八六九年でなく、またゴータ綱領の制定によつてアイゼナハ派とラサール派が合同したドイツ社会主義労働者党誕生の一八七五年、エアフルト綱領採択と共に党名をドイツ社会民主党に変更した一八九〇年でもなく、ラサールが全ドイツ労働者協会を設立した一八六三年に置いたのは、留意されてしかるべきことである。

これに従えば、二〇一三年に結党一五〇周年を迎えるわけだが、二〇〇九年連邦議会選挙で前例のない大敗を喫して危機の中にあるSPDはどのようにしてそれを祝うのか、それとも祝わないのか、それはここで論ずる問題ではないが、一九五七年連邦議会選挙はこの選挙に匹敵する衝撃をSPDに与えていたと言つて過言ではない。一九五七年連邦議会選挙でアデナウアー首相率いるキリスト教民主同盟・キリスト教社

会同盟（CDU・CSU）は得票率で単独過半数を超え（五〇・二％）、三一・八％のSPDは「万年野党」を運命づけられたかのようにであった。

ところが、一九六六年の大連立政権への参加を経て一九六九年にブラントを首相にしてSPDは政権を獲得した。その地点に立つて振り返ると、一九五七年選挙後、一九五〇年代の終わりから六〇年代はじめにかけて、深刻な低落状況にあつたSPDを政権政党に飛躍させることにつながつた一連の決定が下されていくということは、戦後SPD史研究者の共通認識である。その「一連の決定」とは一九五八年の党組織改革と一九五九年の基本綱領（「ゴードスベルク綱領」）制定を柱とした党改革^①、および一九六〇年の外交・防衛政策の転換とブラント首相候補の誕生である。

外交・防衛政策の転換であるが、コンラート・アデナウアー首相が西側諸国と協調して進めていたNATOを中心とする集団安全保障体制に「ドイツ統一の道を閉ざす」という理由で反対を続けていたSPDは、一九五九年三月一九日にドイツ統一政策の集大成と言える「ドイツ・プラン」を発表した^②。しかしこのプランは内外の批判を受け実現可能性を

早々に失い、SPDは苦悩に満ちた曲折を経て一九六〇年六月三〇日、連邦議会におけるヘルベルト・ヴェーナーの演説で「与野党共同の外交・防衛政策」を提唱し、従来の政策からの転換を公に明言した。

この外交・防衛政策の転換は戦後SPD史研究に関わる諸テーマの中で最も関心を集めたものの一つで、汗牛充棟の研究蓄積があるが、それと比較してブラント首相候補誕生については個別研究が乏しい。詳しくは本論で論ずるが、ブラントは長く党内アウトサイダーであり、連邦SPDにおけるその境遇は一九五七年一〇月に西ベルリン市長になってからも一九五九年に至るまで基本的に変わっていないかった。また彼は党改革に全くと言って良いほど関与しておらず、党改革実現の当然の帰結として台頭する立場にもななかった。

ブラントの台頭は短期間に急速であったのだが、当時からブラント首相候補誕生に決定的であったと指摘されていたのは、党中央組織を掌握していたヴェーナー副党首の力であった。ブラントの伝記を著したシエルゲンは「私がブラントを立て、たたきのめす」というヴェーナーの発言を紹介し、「一九六〇年におけるブラント首相候補の誕生はヴェーナーの傑作であった」、「キングメーカーとしてのヴェーナーの策略が決定的であった」と書いている⁴⁾。

つまり、外交・防衛政策の転換に中心的な役割を果たした実力者ヴェーナーが「選挙のための顔」として党内基盤の弱かった西ベルリン市長ブラントを引き立てた、首相候補になったと言ってもブラントは実権のない飾り物で主役はヴェーナーであったという理解が一般的で、なぜあの時点でブラントが首相候補になったのかは、取り立てて掘り下げるべき問題と見なされてこなかった。

その結果、ゴードスベルク綱領制定後の外交・防衛政策の転換とブ

ラント首相候補誕生の内的連関については掘り下げられた考察がなされず、この二つの決定が別々に論じられたり、関連づけるとすればともに「ヴェーナーの力」を強調して事たれりとされるのが少なくない。本稿ではブラント首相候補誕生過程の分析を中心とし、外交・防衛政策の転換との間にどのような関連があったのか、あるいはなかったのかを念頭に置きつつ、ブラント首相候補誕生をもたらしたのが何であったのか、そこにいかなる意義があったのかを検討したい。

2 戦後SPDのアウトサイダーとしてのブラント

(1) 戦後SPDへの復帰と外交・安全保障構想

若き日のブラントはヴァイマル時代、リューベックでユリウス・レーバーの強い影響下にSPDに入党したが、より過激な左翼グループのドイツ社会主義労働者党(SAP)に身を投じ、ナチの政権掌握とともに一九三三年ノルウェーに亡命した。ブラントはマルクス抜きでキリスト教の精神とヒューマニズムから出発したノルウェーの社会主義者に感銘を受け、この地での亡命体験によってブラントは「ドグマとしての社会主義」から解放され⁵⁾、一九四〇年にはノルウェー国籍を取得した。

戦後、ノルウェー軍の軍服を着た報道担当官、つまり占領軍の一員としてベルリンに滞在することになったブラントが、逡巡と葛藤を経て、ノルウェー国籍を捨て戦後ドイツの運命をSPD党员として担おうという決心を固めたのは一九四七年秋になってのことであった⁶⁾。一九四八年一月にブラントはSPDに復帰し、ベルリンSPDとハノーファーのSPD指導部をつなぐ連絡要員、「SPD指導部ベルリン代表」として活動を開始した。

ブラントのベルリンSPDにおけるデビューは一九四八年三月二日、その地区支部ウェディング (Wedding) の党活動家集会で行われた演説であった⁷⁾。この演説に大きな影響を与えていたのは二月五日、チエコスロヴァキアで共産党が全権を掌握した「二月事件」であった。ブラントはまだSPDに復帰する前であったが、一九四七年六月プラハを訪問していた。この時彼の目に映ったのは復興と社会主義建設に励む勤労大衆であり、新聞や議会で、また様々な集会でも活発な議論が交わされ、ヴェンツェル広場では夜を徹して語り合う民衆の姿があった。確かにこの頃から共産党は宣伝手段をはじめ種々の分野で優遇されており、政府を率いていたのは共産党の指導者ゴットヴァルトであったが、共産党に公然と批判を加えることは何ら問題とされていなかった。共産主義者との協力によって個人の自由が危険にさらされることはなく、テロが支配しているようなこともなかった⁸⁾。

ブラントの観察したところ、チエコスロヴァキアの多くの人々にとって、たとえ共産党員でなくても反ソ的外交路線を採ることは選択肢になかった。彼らにとって決定的だったのは「一九三八年の経験」であった。ミュンヘン会談で西欧民主主義国によって見捨てられたという記憶は彼らの意識に深く刻まれており、西側との交易を維持しつつ、ソ連との緊密な協力関係を保つことはチエコスロヴァキア自身の選択していた道であった⁹⁾。冷戦が激化するなかでソ連と敵対して西側諸国と結合する道を選ぶのでなく、「ソ連圏にある西側の国」として、マーシャル・プランの受入れを表明していたチエコスロヴァキアにブラントは希望を寄せていた。

このようなブラントにとって「二月事件」とその後の展開、共産党がヘゲモニーを握り彼が訪れた頃のチエコスロヴァキアが急速に過去の

ものになっていくという事態の変化は、大きな衝撃であった。「東と西の仲介者の役割を果たしようという希望は潰えた。東西に架橋しようという考えは意味を失った」¹⁰⁾、チエコスロヴァキアの悲劇は権力掌握に手を伸ばす共産主義者がいるところなら他の西側でも起こりうることであり「共産党との統一戦線に関わろうとする者は、そのゆえに破滅してゆく」¹¹⁾とまで言い切っていたのは、マサリク外相が「原因不明の転落死」を遂げたわずか二日後の演説であったことも勘案すべきかもしれないが、「二月事件」がブラントに戦後の「原体験」と言つて過言ではないインパクトを与えていたことを示している。

ブラントは以前から共産党と一線を画し、ドイツにおける統一社会主義政党結成に否定的ではあったが、チエコスロヴァキアに対する格別の思いが示すように、戦後もしばらくはヨーロッパ全体の秩序構想としては「反ファシズム統一戦線」に対する期待を捨ててはいなかった。しかし「三月二日演説」にはそのような考え方の残滓はなく、首相就任後、共産主義陣営との緊張緩和を目指す東方外交を展開するブラントと、一見したところ断絶があるかのように思えないほど、ソ連と共産主義に対する批判のレトリックは刺激的である。

「三月二日演説」をもってブラントに「反共主義者」「冷戦派」というレッテルを貼るのは容易かもしれないが、これを彼の思想における「パラダイムの転換点」と位置づけるのは不適切と考える。ブラントのような立場から亡命した者にとって「スターリン主義」は絶えず批判的に向かい合う対象であり続けており、ソ連と共産主義に対する見解が「二月事件」によって「パラダイムの転換」を遂げた結果が「三月二日演説」であったと捉えるのは皮相であって、この演説は「中長期にわたる自己省察過程の帰結」¹²⁾とする見解に基本的には与したい。

ただ「二月事件」の衝撃によって、当面は共産主義勢力とは交渉さえ一切排除するような強固な姿勢が前面に出るようになったのは確かに「変化」ではあるが、彼の基本的な姿勢は原則的にいかなる状況下でも東側と交渉しないというのではなく、アデナウアーと似て、東側との交渉は民主主義的な西側に固く統合され安全が確保されてから着手すべきであるという考えで、首相就任後展開する東外交と断絶しているのではないと考えられる。

ところで、当時「東西の架け橋」としてのチェコスロヴァキアの民主主義に期待を持っていたリベラル左派は決して少なくなかったが、ブラントのチェコスロヴァキアに対する思い入れの深さには特別なものがあった。ブラントの考えではチェコスロヴァキアはすでにソ連の衛星国となっていたポーランド、ユーゴスラヴィア、ブルガリアやルーマニアのような国々とは同じではなかった。これらの国では封建的遺物が強く残り、民主主義の伝統が弱かったがゆえの「社会的変革」が必要とされていたのに対し、チェコスロヴァキアは文盲が少なく、民主主義の伝統のある国であると特別視していた。

反ナチであろうと人民民主主義の立場から行われたものであろうと「不法は不法である」と、ブラントはチェコスロヴァキアによるズデーテン・ドイツ人に対する「一九四五年の復讐」にも言及しているが、相殺できないナチの不法行為、ナチ時代のドイツがチェコスロヴァキアに強いた過酷な運命に強い罪責感を抱いていた。また、「チェコスロヴァキアの実験」の成功の可否は、西側諸国とソ連が対立しているベルリンやドイッツ統一への展望にも関わり、ブラントは注目していたのである。¹³⁾

「三月一二日演説」は新聞でも報道されて評判を呼び、ブラントはベルリンSPDの様々な組織からの演説依頼に対応できなくなるほどで

あった。彼は念入りに仕上げられた文章の演説原稿を手で聴衆の前に現れるのを常としていたが、単に読み上げるのではなく、余人を持つて代え難い迫力と情熱で聴衆の心を捉える演説者であったと言われる。ヘルムート・シュミットは「ブラントの演説は人の心 (Seele) に届くものであった」と述べているが、それはシュミットのまねできないことであった。両者共に「雄弁家」ではあったが、シュミットはいつも理性 (Ratio) に訴えることを優先してしまっからである。¹⁴⁾

ノルウェー人となっていたブラントのキャリアは復帰したばかりのSPDで有利に働くものではなかったが、「SPD指導部ベルリン代表」という職責のゆえに、議題によってはSPD指導部の党幹部会全体会議に陪席することが許され、シューマツハー党首やオレンハウアー副党首をはじめとする戦後SPDの指導者と直接接触する機会があった。その「特権」を生かし、「三月一二日演説」の延長線上にある外交政策の支持を求めてブラントは自ら積極的に動いた。ベルリン封鎖の直中の一九四八年九月三日、ブラントはオレンハウアーに書簡を送り、党大会に派遣されるベルリンSPDの代議員として選ばれる道は閉ざされているが、それでもデュッセルドルフ党大会での論議に参加したい、特に外交問題について発言したいと訴えた。「もしあなたが私の申し出を押しつけがましいと思うのでなければ」というこの懇請は聞き入れられ、党大会初日の九月一日、党首の基調演説¹⁵⁾に引き続く討論の場で、ブラントは初めてSPD党大会で発言の機会を与えられた。

このような経緯で実現した連邦SPDにおけるデビュー演説であったから、社会主義と民主主義を基礎にした「一つのヨーロッパ」を目指すというシューマツハーの考えに賛意を示してはいるが、ブラントはそれに付け加えて、すべての条件が満たされなければ賛成しないとい

うのは不適切で、現時点で決定的に重要なのは民主主義であると強調した。ヨーロッパ統合については、戦間期のパン・ヨーロッパ構想のような「麗しい言い回し」に戻ることは許されないのであって、そのような「ヨーロッパ合衆国」を追い続けるよりも、現に機能して協力し得る共同体を目指すべきであるという趣旨の発言をしていた¹⁷⁾。ブランドの基本構想は「ドイツ統一」を希求しながらも、「鉄のカーテン」の西側の統合を優先し、西側占領地区ドイツを西側民主主義共同体へ統合すべきというもので、「ドイツ統一」に優先順位を置くシューマツハー、およびSPD指導部とは当初から一線を画していた。

ブランドはシューマツハーと同様にソ連共産主義にも社会主義統一政党にも否定的で、思想的にはシューマツハーが強調した「社会主義者となる動機の多元性の承認」を共有しており、「SPD指導部ベルリン代表」として戦後のキャリア形成を始めた。にもかかわらず、間もなくブランドがシューマツハー指導部と対立を深め戦後SPDのアウトサイダーになったのは、政策的には彼の外交・安全保障構想に理由があった。ブランドは一九四九年に連邦議会ベルリン選出議員となり「SPD指導部ベルリン代表」の任を離れるが、一九五〇年のハンブルク大会で彼は当時争点であったシュトラスブルに置かれたヨーロッパ評議会への西ドイツ加入問題につき、SPDは加入に賛成すべきとシューマツハーの外交政策を批判する立場を鮮明にし、両者の関係は決定的に悪化した¹⁸⁾。

ブランドが戦後SPDにおけるアウトサイダーとなったのは、政策的にはその外交政策のゆえであったが、ベルリン封鎖下の西ベルリン市長として国際的な注目と名声を獲得し、シューマツハーと対立していたエルンスト・ロイター¹⁹⁾を師と仰いでいたことも、SPD内におけるブラ

ントの立場を困難なものにしていた。戦後初期SPDを代表するカリスマ的指導者であり、前後して世を去った党首シューマツハー（一九五二年八月死去）とベルリン市長ロイター（一九五三年九月死去）との間にあった対立は深刻であった。その対立をもたらしたのは、政策的には何よりもロイターが東西対立と西ベルリンに対する共産主義の脅威を考慮して「ドイツ統一」の追求よりも「西ドイツの西欧統合」を優先するという外交政策、つまりシューマツハーよりもアデナウアーの西欧統合政策を支持したからであった²⁰⁾。

ブランドの外交構想はロイターと基本的に同じであり、二四歳年長のロイターからブランドは多くを学んでいたが、ロイターの影響下に形不成ないし転換された外交構想というのではなく、ブランド自身の亡命とベルリンにおける体験に基づいて彼自身の中で練り上げられていたものと考えらるべきである。両者ともに「ソ連占領地区」に囲まれた都市に住むベルリン人であり、その彼方に住む西ドイツ人とは異なる立場から考え抜いた外交構想が一致し、共に連邦SPD、およびベルリンにおけるその代理人と対立せざるを得なくなったのである。

ただ、シューマツハーのロイターに対する敵愾心は単なる外交政策の違いを超えたものであった。ロイターはソ連によるベルリン封鎖時の市長であったがゆえに「ソ連共産主義と戦う自由の闘士」として脚光を浴び、賞賛の声の中でアメリカに招待された戦後最初のドイツ人政治家であった。少し前までは蔑まれるだけだった旧敵国の一地方政治家としては破格の扱いを受けて、ロイターはアメリカ各地で演説の機会を与えられ、占領国に対して辛辣な批判を繰り返すシューマツハー党首よりも、西側世界ではドイツを代表する政治家として肯定的に名を知られるようになった²¹⁾。

シューマツハー時代のSPDは「両雄並び立たず」で、ロイターの声望はSPDにおける自らの地位を脅かしかねないものとシューマツハーに危機感を与えた。またシューマツハーは黨員に服従を求め、民主主義を強調してはいたが、彼を批判する者には寛大でいられないタイプ指導者であった。ロイターは、ブランドも同じであったが、党内反対者を退ける際のシューマツハーの行動様式には強い違和感を持っていた。ロイターは戦後ドイツにおける民主主義の建設を全ての民主主義者の共同作業と捉えていたが、シューマツハーは「ドイツの民主主義は社会主義的である場合にのみ可であり、それ以外はあり得ない」と排他的であった。²²⁾

このような民主主義観に立てば、「建設的野党」の路線を取ると言いながら、シューマツハーの連邦SPDは頑なにCDUとの連立を拒否する野党路線を採らざるを得なくなり、それはまた連立を排除しないロイターやブランドに対する攻撃となった。かくの如きシューマツハーの政治様式は、ブルジョワ政党との連立を原則的に拒否してドイツ政治の議会主義化を阻んでいた帝政期のSPDに近いと思われた。連邦SPDにとってブランドは、シューマツハーの死後もその中心に迎えることは考えられない異端児だったのである。

(2) ノイマンに圧倒されるブランド：

ベルリンSPDにおける権力闘争

「ベルリンにおけるシューマツハーの代理人」として君臨していたのは、ベルリンSPD委員長フランツ・ノイマンであった。ストラスプールに置かれたヨーロッパ評議会への加入、シューマン・プランへの対応など、アデナウアーとシューマツハーが正面から対立した問題につい

て、ベルリンではノイマンがいつもシューマツハーを支持し、ロイターとブランドが異を唱えるという対立関係がベルリンSPDでは構造化していった。

ノイマンは一九〇四年に貧しい労働者の家庭に生まれ、学歴は国民学校を出ただけという典型的な労働者黨員で、SPDの古いタイプの活動家を代表していた。彼が戦後ベルリンSPDで重きをなしたのは、一九四六年春にソ連占領地区でSPDとKPDの組織統一が強行され社会主義統一党(SED)が設立された際に、ソ連地区SPD指導者のグロテヴォールに反旗を翻し、ベルリンSPDの全党員投票を実現してベルリンにSPDを存続させることに成功したリーダーだったからである。²³⁾この過程でノイマンはシューマツハーの厚い信頼を得ることとなり、ベルリンSPD委員長としての地位を不動のものとしていた。遅れてドイツに戻ったロイターやブランドは、特に西ベルリン市長としてロイターは絶大な威信を獲得するが、それでも党の人事や党内活動においては「勇気ある、しかしあまりに偏狭な伝統主義者」とブランドの目に映ったノイマンに対抗できなかつた。²⁴⁾

亡命時代にブランドを支えていた、傑出したジャーナリストとしての能力を生かして彼はノイマンに挑戦した。一九四九年末以来、ブランドはベルリンSPDの支部ヴィルマースドルフ(Wilmersdorf)支部長として活動し地方政治への関与を強めていたが、一九五一年に至るも保険証の職業欄には「フリーの著述業」とか「編集長」(Berliner Staatsblatt)という機関紙の編集長を一九五〇年から翌年の廃刊まで務めていたと記していた。スカンディナヴィアの新聞も含め彼の発表の場は広く、一九五〇年だけで三〇〇を超える記事を書き、筆の力をもってノイマンのベルリンSPD指導部を批判した。このような目覚ましい言

論活動はレトリックを駆使して一般世論にアピールする能力に乏しく、何よりもハノーファーのSPD指導部に忠実にベルリンSPDを運営しようとした労働者党員ノイマンの及ぶところではなかった。

またブランドは写真写りのよい政治家で、一九五〇年代から六〇年代にかけてテレビの影響力が増すと一層際立つ存在となった。彼にはメディアの関心を惹きつける天性の資質があり、「タキシードを着た社会主義者 (Sozis im Smoking)」と揶揄されるような社交的で、享樂家の一面を持ち合わせていた。ベルリンの社交界で華やかに遊ぶブランドの姿はメディアの好んで取り上げるところとなり、それは一般には魅力的な人物と映っても、ノイマンをはじめとする伝統主義者には受け入れられなかった。

一九五〇年代を通じて続けられたベルリンSPDにおけるブランドとノイマンの熾烈な権力闘争は、多分にロイターとシューマツハーの対立を受け継いでいた。ただ、それぞれの師の対立が単なる個人レベルの確執ではなく、西ドイツの外交・安全保障政策および党運営・党内民主主義のあり方をめぐる二つのオルターナティヴをめぐる争いであったように、ブランドとノイマンの対立もそれに加えて、戦後SPDにおける二つの異なるタイプの対立、つまり戦後SPDがどのような力を中心に発展すべきかに関わる党の本質をめぐる対立を象徴していた。

ブランドはロイターの支援を受けて一九五二年のベルリンSPD委員長選挙に立候補したが、ノイマンに一九六対九三の大差で敗れ、次の挑戦でも苦汁をなめた。またSPDの党大会で行われる党幹部会員選挙で、ノイマンは一九四六年以来当選を重ねていたが、ブランドは初挑戦の一九五四年のベルリン党大会、一九五六年のミュンヘン党大会と落選を繰り返していた。圧倒的に不利な状況の中で諦めずに挑み続けていた

が、ブランドはベルリンで委員長のノイマンに圧迫され、ハノーファーのSPD指導部からも「アメリカ派」として疎外されるアウトサイダーからなかなか脱却できずにいた。

3 ブランドの台頭

(1) ベルリンSPDの制覇

風向きが変わってきたのは一九五〇年代後半になってからである。

一九五六年一月、ハンガリーでのソ連軍の弾圧を聞いて激高した群衆がソ連大使館に押し寄せようとした混乱の中、ブランドは持ち前の雄弁をもって巧に制御し、速やかに秩序を回復させた。この時の落ち着いた対応とリーダーシップは際だっており、ベルリンにおけるブランドの声望は高まっていった。党内よりも、党派を超えた場での名声がブランドを後押しした。

決定的な転機は一九五七年に訪れた。この年の八月に死去した西ベルリン市長オット・ブーアの後任として、西ベルリン市議会は一〇月ブランドを新市長に選んだ。この時ノイマンは、八方手を尽くしてブランド市長誕生を阻止しようとした。以前であれば、このような場合、ノイマンとハノーファーのSPD指導部の関係が見られたが、ブランド自身が回顧録で感謝の念をもって記しているように、一九五七年九月の連邦議会選挙後「オレンハウアーはノイマンを退け、何の留保や条件も付けず私の立候補を支持してくれた」のであった。

ベルリンSPDにおけるブランドとノイマンの形勢は明らかに逆転し、一九五八年一月、ブランドはついにノイマンに勝利を収めた。クルウス・シュッツを中心に「ブランド・クルー」(Brandt-Crew)と呼ばれ

るようになった側近グループは、党大会に出席する代議員全員の政治的見解や要求をカードにまとめ、それに基づいて個別に代議員との折衝にあたってブランドへの支持を求めた。このようなシステム化された「ぶ板選挙活動」の結果、一〇の区支部 (Kreis) のうち一二の支持を得て、ブランドはベルリンSPD委員長の地位を獲得したのである。³²⁾

ブランドを先頭に立てて行われた一九五八年二月七日の西ベルリン市議会議員選挙で、SPDは五二・六%の得票率で圧勝した。前年の連邦議会選挙での惨敗とは対照的なこの結果は、次回の連邦議会選挙における「SPDの顔」としてのブランドに対する期待を浮上させたが、この選挙は他の理由からも単に一地方議会選挙には留まらない画期的意義を持っていた。ブランドは党内に根強くあった反対を押しきって、アメリカの選挙戦のやり方をモデルとして、SPDの伝統的なスタイルとは全く異なる選挙戦を展開したのである。政治とアメリカ流の娯楽を合体させ、すべての住民層を引きつけて訴えかける新しい集会スタイルが考案され、「選挙政治のアメリカ化」をブランドは進めた。³³⁾

一九五七年連邦議会選挙にSPDが惨敗した原因は色々であったが、「経済の奇跡」を背景にした戦後の社会変化・住民の意識変化をほとんど考慮せず、伝統的な選挙運動・宣伝を繰り返していたことが一つの敗因であった。この点では、SPDはまだ「古い労働者政党」のままであった。そこを「アメリカ派」のブランドは改革して成功を収め、SPDを「国民政党左派」に脱皮させる力となっていくのではあるが、これはまだ労働者が多数派を占め、縁の下の力持ち的な役割を引き受けていた党員が少なからずいたSPDにおいて摩擦を伴わざるを得なかった。アメリカ的生活様式を肯定し、タキシードを着ることを好むブランドに対しては、「ブルジョワ的すぎる」「禁欲的ではない」と違和感を覚

える党員もまだ多かったのである。³⁴⁾

もう一つ、この選挙結果に関連して留意したいことは、SPDは単独で西ベルリン市政を担うに余りある勝利を収めたのに、ブランドは単独政権を選ばずCDUとの大連立政権を継続したことである。背景にあったのは、一九五八年一月、六ヶ月以内に西ベルリンは自由都市化されるべきとの最後通牒がフルシチョフによって突きつけられて勃発したベルリン危機であり、西ベルリンの生存と安全のために超党派で「共同のドイツ・ベルリン政策」を推進すべきであるという判断であった。

かくしてブランドは一九五八年にベルリンSPDに圧倒的な勢力を持つに至ったが、この後のノイマンに対する対応は、冷徹な権力政治家としてのブランドの一面を示す。³⁵⁾ ノイマンが権力を握っていた時は党内民主主義を主張していたブランドが、いったんその地位を奪うと、スターリン時代の大粛正のなかを生き延びたヴェーナーをして「政治的な兄弟殺し」と言わしめた報復人事を行うにためらいを見せなかった。ブランドは様々な手段を用い、「ノイマン派」と目された古参の労働者党員の幹部、ノイマンと同じようなプロイセン型の伝統主義者に圧力を加え、ポストを奪っていった。一九五九年の終わりには「ノイマン派」はベルリンSPD指導部から一掃されており、ノイマン自身も一九六〇年には西ベルリン市議会の議席を放棄せざるを得ないところまで追い込まれていったのである。

(2) ブランドを全国レベルの政治家に上昇させた三人の「代父」

ペーター・メルセブルガーによれば、一九五七年一〇月に西ベルリン市長に選ばれたとはいえ、一地方政治家に過ぎなかったブランドが二年弱という短期間にドイツ全体を代表する政治家として成功を収めるこ

とができたのには、三人の実力者が与って力となっていた。彼らは揺りかごの傍らに立って幼子を保護する「代父」(Pate)として、全国レベルの著名な政治家としてブランドが台頭する手助けをしていたというのである。^{⑤6}この三人の中に、社会民主党員は一人もいない。

一人はソ連のニキタ・フルシチョフである。一九五八年一月に彼が行った提案、すなわちポツダム協定に基づくベルリン四方国管理を破棄して東ベルリン管理権を東ドイツに移す、そして西ベルリンの自由都市化^{⑤7}西側三国軍隊の撤退を要求した「ベルリン最後通牒」によって惹起されたベルリン危機によって、「自由の砦」としての西ベルリンを代表する市長の演説と行動は脚光を浴びるようになり、他のどの市長とも異なる特別の注目を集めることになった。

二人目は、SPDと対立する西ドイツ首相にしてCDU党首のコンラート・アデナウアーである。フルシチョフの引き起こしたベルリン危機を前にして、「共産主義の脅威」から「西ベルリンの自由」を護ることは西ドイツにとって党派的対立を超えた共同の課題であった。ゆえに一九五八年当時アデナウアーは、この西ベルリン市長になったばかりの若い政治家を自らの名代として連邦政府の財政負担において世界各地に派遣して、演説と活動の場を与えた。

関連して登場する第三の「代父」は、『ビルト』や『ヴェルト』をはじめとする新聞・雑誌・出版コングロマリットを創り上げたアクセル・シュプリンガーである。シュプリンガーはCDUに近い保守的な出版人であり、一九六〇年代後半の学生運動は彼とそのメディアを目の敵にしていたが、シュプリンガーはこの時期ブランドの強力な支持者であった。何よりもブランドは、SPD内にあつてアデナウアーに最も近い外交・防衛政策を掲げていた。一九五八年二月、ベルリンのシュプリン

ガー系新聞はアデナウアーとブランドの「大連立」を提唱していた。^{⑤8}同月、前述したようにブランドのベルリンSPDは五二%を超える得票率でベルリン市議会選挙で圧勝したにもかかわらず、CDUとの大連立を維持したことは、この呼びかけに応えるものであった。と同時に、ブランド自身の中にあり、SPD主流派が退けていた「共同の外交・防衛政策」をアピールするものであった。

(3) 「七名委員会」の設置からブランド首相候補の決定まで

基本綱領制定の最終段階にあつた一九五九年七月、オレンハウアー党首は次の連邦議会選挙ではSPDの首相候補にならないことを明言した。これを受けて、新たな首相候補者の人選と選挙戦基本戦略の策定にあたるため、七月五日の党幹部会全体会議ではオレンハウアーを座長とする委員会(オレンハウアー、ブランド、ツイン、ブラウアー、カロ・シュミット、ダイスト、エルラーの七名から構成)が設置された。^{⑤9}

この「七名委員会」に一九五八年党大会で選ばれた二人の副党首、ヴェーナーとクネーリングは入らなかつた。また、この二人はいずれも首相候補になるつもりはないことを早い段階から明らかにしていた。「七名委員会」の構成を見ると、カロ・シュミット、エルラー、ダイストの三名はいずれも一九五八年党組織改革を推進した「改革派」を代表する連邦議会議員団副団長(オレンハウアー党首は議員団長を兼任)、ブランド(西ベルリン市長)、ツイン(ヘッセン州首相)、ブラウアー(ハンブルク市長)の三名が首長であり、「改革派」を中心として、地方の声を重視して決定しているという姿勢がうかがえる布陣であつた

一九五九年夏の時点で衆目の一致する首相候補は確定しておらず、

ブランドも含めて複数の名前が取りざたされていたが、当初最も有力視されていたのはカルロ・シュミットであった。⁽³⁸⁾西ドイツ基本法制定に中心的な役割を果たした一人で、大学教授でもあったカルロ・シュミットは戦後の新入党員であったが、SPDの伝統主義的体質に対する先鋭的な批判者で、伝統的な支持階層を超えて中間層、特に教養市民層の系譜を引く知識人や官吏等にSPDの支持基盤を拡大するためにふさわしい人物であった。アデナウアーにとって、私生児かつ左翼過激派の亡命者という過去を持つブランドよりも、カルロ・シュミットの方が選挙で攻撃しにくい相手だったし、党改革によって「SPDは変わった」という印象を世論にアピールするにはシュミットの方が適任であった。

連邦SPDでのキャリアはカルロ・シュミットの方が上であり、「七名委員会」結成の時点ではシュミットの方があると思われる。一九五九年七月五日の党幹部会全体会議ではブランド自身が「一九六〇年の初頭にはカルロ・シュミットを首相候補に決めるべきだろう」と発言していたのである。⁽³⁹⁾「七名委員会」は内密の会議で議事録は残されていないし、議論の途中経過が党幹部会全体会議で詳しく報告されたこともなかったため、ブランド首相候補内定にいたる「七名委員会」での議論の詳細については不明なところが多く、この史料制約がブランド首相候補誕生過程の解明に限界を与えてはいる。

とはいえ、一九六〇年一月二十九日の党幹部会全体会議では、この件について若干の言及があった。ヴェーナーがブランドの評価が高まっていると発言したのに対し、ヘルムート・シュミットはハノーファーで一月に開催予定の党大会まで決定を下すべきではないと述べ、カルロ・シュミットは、自分であろうとブランドであろうと、彼としては党の決定を受け入れると応じていた。⁽⁴⁰⁾「七名委員会」の座長であつ

たオレンハウアー党首は、この委員会は五月初めを目処に首相候補を含めて一九六一年連邦議会選挙準備の方向付けを行いたい、その際首相候補だけでなく彼を支えるSPDの広い基盤を代表する「チーム」(Mannschaft)を組織し、首相候補も「チーム」も発表は党大会で行いたいと、述べていた。⁽⁴¹⁾一九六〇年一月の時点では、この年の一月に予定されていたハノーファー党大会までの然るべき時期に新首相候補が決定するという見込みが共有されていたが、一人に絞り込まれていたのはなかった。

ブランドがSPDの首相候補に内定したのは、内定の時はまだ当面の間は非公表と関係者の間で申し合わされていたが、一九六〇年七月十一日に開催された党幹部会常任幹事会と「七名委員会」合同の非公式会議の場であった。何がこの「逆転」をもたらしたのであろうか。

ブランド首相候補を誕生させた要因は決して一つではない。前章で言及したように、一九五八年十一月以来のベルリン危機の先鋭化によって西ベルリン市長に世間の注目が集まり、野党党首よりもブランドは「時の人」となった。またこの地位のゆえにブランドには西側諸国の著名な政治家との会談の場が多く与えられ、一市長としては例外的な太いパイプを同盟国の要人との間に築くことが出来た。そして、そのような華々しい活躍がメディア、特に一般大衆の世論形成に絶大な影響力を持つ『ビルト』を始めとするシュプリングァー系のメディアによって繰り返して宣伝された。

アイゼンハワーやハマースホルド、ネルーや昭和天皇と会談する写真付きの記事がベルリンの地方版だけでなく全国版の新聞に掲載され、「ドイツの希望の星」と宣伝されたブランドの知名度と評価は高まっていた。ブランドの人気は党外の方が党内よりも先行していた。

一九五〇年代末から六〇年代にかけてのブラントの台頭期、彼はアデナウアーに象徴される復古的で権威主義的な西側志向に対するオルターナティブ、若い世代を取り込み近代化の先頭に立つ、もう一つの西側志向の象徴的存在になっていった。

ブラントをアウトサイダーに押し込めていたSPDであったが、一九五七年九月の連邦議会選挙の大敗と、ブラントが先頭に立つて成し遂げた一九五八年一二月ベルリン市議会選挙の大勝利の落差は、「選挙のための顔」としてのブラントに対する期待を高めていった。ただ、彼は「選挙のための顔」としてヴェーナーによって首相候補に祭り上げられたというだけの存在だったのであるのか。

実はこの間、ブラント自身が首相候補になるために意欲的に活動していた。ノイマンを倒してベルリンSPD委員長となった一九五八年一月のベルリンSPD党大会で、彼はやがて自分は首相候補になるであろうという予感を抱きつつ演説をしたと回顧しているが、「七名委員会」が組織されて間もなく、彼はかつてSPDの軍事問題顧問を務め旧知の間柄であったベアアマンに宛てた私信で、オレンハウアーの首相候補辞退を受けて状況が流動的であることを歓迎しつつ、「ベルリンの課題と並んで、ますます西ドイツの問題に関心を持たなければならぬ」と首相候補になる意欲をにじませていた。⁴⁴ベルリンのことを第一に考えていると言いつつも、ロイターのようにベルリンのために骨を埋めるにはとどまらない野心をブラントは持っていた。

ブラントは表向きは慎重を装いながらも、「ブラント・クルー」⁴⁵を手足のように動かしながら首相候補の地位獲得を目指して運動を展開していた。ブラントの参謀にして選挙運動事務局長というべきはシュッツであったが、彼はすでに一九五九年、SPDの若い議員を招いてブラント

の考えを伝えるための集会を重ねていた。その総決算として開かれたのが一九六〇年七月九〜一〇日、ニーダーザクセンのバルシングハウゼンで開かれた集会で、ここでブラントは八〇名ほどのSPDの若い政治家を集めて、来るべき連邦議会選挙にどう臨むかについて意見交換を行った。⁴⁶

一月の党幹部会全体会議で首相候補に目処を付けたいとしていた五月初めは過ぎていたが、偶然か否か、バルシングハウゼン集会はブラント首相候補を事実上決定した七月十一日の内密の会議の直前であり、ブラント首相候補実現を希望する若手の「総決起集会」と言えなくはないデモンストレーションであった。このバルシングハウゼン集会をめぐっては、七月十九日の党幹部会全体会議で議論があった。

この集会の開催を、ブラントは党指導部に事前に連絡していなかった。そのことにオレンハウアーは不快感を表明したが、ヘルムート・シュミットやエルラーは、党中央の関与しない場で意見交換をする機会が少ないと若い人々は感じていると容認する姿勢を示した。また、ノルトライン・ヴェストファーレン州首相を務めていたフリッツ・シュタインホフは、彼自身は一八九七年生まれの年長黨員であってブラントの示威活動に違和感を覚えていたが、属する最大のSPD地方組織である西ヴェストファーレン (Beirik Westliches Westfalen) の専従黨員がバルシングハウゼン集会に参加し、ブラントを支持するようになったというエピソードを披露し彼を擁護した。⁴⁷

また、七月十一日の決定はしばらく公にせず、党幹部会全体会議など機関決定を済ませた後で正式発表するという手順が合意されていたにもかかわらず、その前に「ブラント首相候補決定」が何者かによってメディアにリークされ、大々的に報道されてしまうという事件が起こって

いた。この約束違反はオレンハウアーを刺激し、ヘッセン州首相で「七名委員会」のメンバーでもあったツインも、内密の情報がメディアに漏れたことは遺憾であると述べたが、結局、党大会を待たずしてブランド首相候補は既成事実化していった。⁴⁹⁾

積極的に動いていたブランドに対して、「側近グループ」を持たなかったカルロ・シュミットは自分の名前が挙がっていることは自覚していたし、推されれば拒否はしなかったと思うが、指名獲得のために積極的に動くことはなかった。この間の事情についてシュミットは回顧録で、「対外的にも対内的にも、困難な試練に立たされるであろう首相に不可欠な資質が私には欠けている」と書いている。正しい自己評価と云うべきかもしれないが、「政治とは野心という毒牙を持つ蛇のようなもので、私はそれに噛まれないようにした」と語るシュミットは、西ベルリン市長としての活躍を見てブランドこそが首相候補として最適であり、彼自身はブランドの助言者として働いた方がよいと考えたと述懐している。⁵⁰⁾ 大学教授の肩書きを持ち、権力闘争を生業とする政治家に徹し切れないカルロ・シュミットは、所詮ブランドの競合者ではなかった。

4 おわりに：ブランド首相候補誕生をもたらしたのも

ブランドは首相候補の地位を目指して自ら精力的に動いており、有力者に引き立てられることを待つタイプではなかった。とはいえ、最終的にブランドの野心がSPD指導部内で受け入れられるに際してヴェーナーの支持が大きかったのは「定説」通りである。本稿でこれまで論じてきたことを前提にして確認したいことは、ヴェーナーを、また彼に限らずブランドをアウトサイダーにしていたSPD指導部全体をブランド

支持に向かわせた要因は何だったのかである。それは、単に彼が「選挙のための顔」としてふさわしかったからだけであろうか。ブランド首相候補の実質的決定が、ヴェーナーの連邦議会での演説によってSPDの外交・防衛政策の転換が告知された一九六〇年六月三〇日の直後と言っている時期であったことは、単なる偶然だったのであるか。

詳細に検討されている外交・防衛政策の転換過程の研究ではあるが、「六月三〇日までの党指導部——オレンハウアー、ヴェーナー、エルラー——の行動は慎重に計算つくされたもの」であったと書かれるように、⁵¹⁾ 往々にして転換過程は党幹部会全体会議議事録をはじめ史料が豊富な指導部内の動きにのみ焦点を合わせた分析になり、特に日本での研究は、ブランドをはじめ指導部外にいた人々の動きと影響が軽視されがちであった。

2・(1)で論じたように、ブランドの基本的外交・安全保障構想は、アデナウアーと重なるところが多かった。そのゆえにSPD指導部から疎んじられ、シュプリンガーの応援を受けたのであるが、その一貫した立場からブランドは「ドイツ・プラン」を厳しく批判した。ベルリン危機という緊迫した国際情勢は「ドイツ・プラン」を提出したヴェーナーらSPD指導部にも影響を与えていたが、ブランドはそれ以前から「ベルリン問題」に日々向き合って生活していた。ゆえに単なる批判だけではなく、SPD復帰以来彼が抱いていた外交・安全保障構想に基づいて、一九五八年のベルリン市議会選挙で大勝した後もCDUとの大連立をベルリンで維持することによって超党派で進めていた「共同のドイツ・ベルリン政策」を、一九六〇年一月に入るとアデナウアーにも呼びかける形で連邦レベルでも合意を得ようと行動していた。⁵²⁾ ここにSPD指導部に影響を与え、六月三〇日の外交・防衛政策の転換に至る

原動力を見ることができるといえる。「ドイツ・プラン」の挫折は一九六〇年に入る前から明白になっており、行き詰まった連邦SPDにとってブラントの存在と政策は袋小路から脱却して攻勢に立つためのオルターナティブであったからである。

一九六〇年二月以降、ヴェーナーを始めSPD指導部から「ドイツ・プラン」を放棄するという示唆的発言が聞かれるようになったが、五月のパリ会談の決裂は与野党「共同の外交・防衛政策」を加速させるべしという主張を強める画期となった³³。六月三〇日の演説はヴェーナーが行い、そのゆえに外交・防衛政策の転換の主導者がヴェーナーであったかの如き印象が生まれたが、「共同の外交・防衛政策」はSPD指導部内で醸成されたものではなく、ブラントへの歩み寄りであった。ヴェーナーが議論の出発点として依拠していたのが、六月二四日にブラントがミュールハイムで行った演説で示した「与野党間に対立することは許されない六項目」であり、ヴェーナー演説はこれを引用して行われていたことを付言しておこう³⁴。

組織改革やゴードスベルク綱領制定過程でもうかがえたが、ヴェーナーは決して「転換」の原動力として最初から動いていたのではない。彼は「ドイツ・プラン」の最高責任者であり、推進者であった。ただ、誤解を恐れずに言えば、彼は「転換」せざるを得ない状況が生じると素早く合流し、組織全体を動かし、「転換」の実現に際してはそれがあたかも彼の功績であったかの如く内外に印象づける手腕に長けた、傑出した戦術家であった。

六月三〇日のSPDの外交・防衛政策の転換とはヴェーナーの「ブラントに対する降伏」と言うのは言い過ぎかもしれないが、「ブラントへの歩み寄り」であって、その逆ではなかった。アウトサイダーのブラ

ントがヴェーナーに歩み寄って首相候補に引き立てられたのではない。歩み寄ったのはヴェーナーであり、SPD指導部であった。

SPD内におけるブラントの地位を「アウトサイダー」から「希望の星」へ短期間に急速に高めたのは、「選挙のための顔」に相応しいというイメージだけでなく、「ドイツ・プラン」の挫折と、代案の提示で攻勢に立つことによつて「ドイツ・プラン」の責任を問われなくなつたSPD指導部がブラントへ歩み寄つたことが大きく作用していた。実力者ヴェーナーを中心に外交・防衛政策の転換とブラント首相候補誕生が実現したというよりは、以上のような連関において、「ドイツ・プラン」の挫折、外交・防衛政策の転換とブラント首相候補誕生は表裏一体の関係にあつたのである。

この過程でブラント、エルラー、ヴェーナー三名の協力関係、一九五八年の「トロイカ」³⁵（カルロ・シュミット、エルラー、ヴェーナー）に代わる「新トロイカ」が形成され、一月のハノーファー党大会につながつていくのである。正式にブラントを首相候補に決定したハノーファー党大会を経て、SPDがどのような態勢と政策体系を作り、一九六一年九月の連邦議会選挙をいかに戦い、自らを変えていったか。そこにどのような問題があつたか。ブラントが先頭に立つて推進していく「共同の政治」（Gemeinsankespolitik）とは、一九五〇年代に形成されたシステムへの単なる順応以外の何物でもなく、社会民主主義の原則をなおざりにし、もう一つの選択肢の提示を放棄し民主政治を権力獲得の手段のみにしたという類の、よくなされる批判にどう答えるべきかは次稿の課題とさせていただが、最後にハノーファー党大会でブラントが行つた首相候補受諾演説の一節を引用して本稿を閉じることとした。それは本稿で論じた首相候補誕生過程を踏まえると興味深く、かつ

当時まだ四六歳の候補者が彼を引き立てたとされる年長の党幹部、シューマッハー時代からSPDの中心にいた人々を前にして語る「謝辞」としては、相当に大胆な言葉であった。

「私はわれわれの忘れ得ぬエルンスト・ロイターの弟子であり、友人であることを誇りに思う⁽⁸⁷⁾」、「われわれは約一〇〇年にわたる党の歴史を誇りに思う。社会民主党は祖国の栄光と悲惨をともに経験してきたが、われわれはドイツの歴史のごく一部なのである。多くの源から今のドイツは成り立っており、オット・フォン・ビスマルクとアウグスト・ベーベル、フリードリヒ・エーベルトとグスタフ・シュトレーゼマン、ユリウス・レーバーとシュタウフェンベルク伯爵、エルンスト・ロイターとテオドア・ホイス、彼らは皆、この国民に属しているのである。しかし、ヒトラーの名前と結びついたおぞましきことを、いかなる沈黙も忘れさせることはできない。このすべてがわれわれの歴史に属しており、それを一体のものとしてわれわれは見なければいけないのだ⁽⁸⁸⁾」。

「このようなこと言うと歓迎されないかもしれないが、私は党の意志の単なる執行者にはなりえず、熟慮したあとは自分の責任で国民のために必要な決定を下さなければならぬだろう。しかし、私は知っている。私に信頼を与えてくれていた社会民主党は、基本法に従ってこの職務が必要としている決定の自由を私に与えてくれるであろう⁽⁸⁹⁾」。

注

- (1) 党改革については以下の拙著で詳述した。安野正明『戦後ドイツ社会民主党史研究序説』（ミネルヴァ書房、二〇〇四年）。
- (2) 「ドイツ・プラン」の概要は、たとえば、高橋進「ドイツ社会民主党と外交政策の『転換』（一九五五—一九六一年）」『国家学会雑誌』九九—一〇二（一九八六年）、七二—七三頁。第一段階では東西ドイツが対等で構成する「全ドイツ会議」を設置して東西ドイツ関係を処理すべきと提案し、段階的に政治統合を進め再統一を実現しようとした。共産主義陣営、東ドイツと対等の立場で対話することを前提とした再統一案で、英米仏ソに加え東西ドイツをオブザーバーとする常設委員会の設置を求めていた。

- (3) 前掲拙著、三〇一—三〇二頁。
- (4) Gregor Schöllgen, *Willy Brandt*. Berlin/München, 2001, S.107.
- (5) Interview des Vorsitzenden der SPD und Regierenden Bürgermeisters von Berlin, Brandt, mit dem Journalisten Gaus für das ZDF, 25. September 1964, in: Willy Brandt, *Berliner Ausgabe*, Bd. 4, Bonn, 2000, S.315.
- (6) Rundschreiben des Presseattachés an der Norwegischen Militärmission in Berlin, Brandt, 11. November 1947, in: *Berliner Ausgabe*, Bd.4, S.80-81.
- (7) Aus der Rede des Vertreters des SPD-Parteivorstandes in Berlin, Brandt, vor Funktionen der Berliner SPD, 12. März 1948, in: Willy Brandt, *Berliner Ausgabe*, Bd.3, Bonn, 2004, S.104-114. この演説の主要部分は、その背景説明も含めて、以下の文献にも引かれてる⁽⁹⁰⁾。Willy Brandt, *Mein Weg nach Berlin*, München, 1960, S.222-227.
- (80) Willy Brandt, *Mein Weg nach Berlin*, S.222-223.
- (90) *Ebenda*, S.224.

- (10) *Ebenda*, S.224.
- (11) *Ebenda*, S.226.
- (12) Siegfried Heimann, Einleitung, in: *Berliner Ausgabe*, Bd.3, S.21.
- (13) Willy Brandt, *Mein Weg nach Berlin*, S.225-226.
- (14) Schöllgen, *a.a.O.*, S.109.
- (15) Schreiben des Vertreters des SPD-Parteivorstandes in Berlin, Brandt, an den stellvertretenden Vorsitzenden der SPD, Ollenhauer, am 3. September 1948, in: *Berliner Ausgabe*, Bd.4, S.91.
- (16) この時期シューマッハーは病床にありオレンハウアーが党務を総括していたが、党大会ではシューマッハーの原稿が代読される形で基調演説が行われた。
- (17) *Protokoll der Verhandlungen des Parteitag der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands vom 11. bis 14. September 1948 in Düsseldorf*, Hamburg, o.J., S.59.
- (18) *Protokoll der Verhandlungen des Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands vom 21. bis 25. Mai 1950 in Hamburg*, Frankfurt am Main, o.J., S.105. シューマッハーとの関係悪化に「つづ」 Schreiben des Berliner Vertreters im Deutschen Bundestag, Brandt an den ehemaligen Mitarbeiter der Abteilung Political Parties des Civil Administration Office von OMGUS Bolton, 9. Juni 1950, in: *Berliner Ausgabe*, Bd.4, S.142-143.
- (19) 一八八九年生まれのロイターはSPDに所属していたが、ロシア革命の影響を受けてKPDに加わり幹部となり、一九二一年の一時期は書記長の要職にあったが、翌年KPDを離れSPDに復帰した。ナチ時代はイギリスを経てトルコに亡命し、一九四六年一月にドイツに戻り、ベルリンに活動拠点を定めた。KPDに限らず、ブランドもその
- 一人であるが、一時期はSPDに飽きたらず、よりラディカルな党派に身を置きながら、様々な経緯を経て後にSPDに戻って活動を続け、た有名無名の人々が多かった。
- (20) Carola Stern, *Willy Brandt*, Reinbeck bei Hamburg, 2002, S.51.
- (21) Peter Menseburger, *Willy Brandt*, Stuttgart/München, 2002, S.283-284.
- (22) Stern, *a.a.O.*, S.52.
- (23) 前掲拙著、四五―四八頁。
- (24) Willy Brandt, *Erinnerungen*, Frankfurt am Main, 1989, S.29.
- (25) Schöllgen, *a.a.O.*, S.89-90.
- (26) Stern, *a.a.O.*, S.59.
- (27) *Ebenda*, S.54, Peter Koch, *Willy Brandt*, Berlin, 1988, S.178.
- (28) 党本部に勤務する専従党幹部会員（有給党幹部会員）は承認を求め、投票であったが、それ以外の幹部会員（無給党幹部会員）選挙（定員二三名）では毎回数名の落選者が出ていた。一九五四年党大会での選挙結果は *Protokoll der Verhandlungen des Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands vom 20. bis 24. Juli 1954 in Berlin*, o.O., o.J., S.304, 314. ブランドトは二五五票で落選（二七位）、ノイマンは二七〇票の六位で当選。一九五六年党大会での選挙結果は *Protokoll der Verhandlungen des Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands vom 10. bis 14. Juli 1956 in München*, o.O., o.J., S.313-314. ブランドトは一九四票で落選（二六位）、ノイマンは三〇〇票で一二位当選であった。
- (29) Brandt, *Erinnerungen*, S.31-32. Brandt, *Mein Weg nach Berlin*, S.316-319.
- (30) Stern, *a.a.O.*, S.56.
- (31) Brandt, *Erinnerungen*, S.32-33.

- (32) Stern, *aa.O.*, S.54.
- (33) Ebenda, S.57-58.
- (34) Horst Ehnke, *Mitredrin*, Berlin, 1994, S.187.
- (35) Koch, *aa.O.*, S.190
- (36) Menseburger, *aa.O.*, S.343-344.
- (37) Ebenda, S.356-357.
- (38) Kurt Klotzbach, *Der Weg zur Staatspartei*, Berlin/Bonn, 1982, S.508. なお一九五七年暮れに設置され、一九五八年三月に党組織改革案(シュエットガルト党大会で実現する組織改革の原案)を作成した委員会も七名(オレンハウアー、メリエス、ナオ、エルラー、カルロ・シュミット、ヴェーナー、クネーリンゲン)からなっていたので「七名委員会」と通称されるが、それとは別のワーキング・グループである。この旧「七名委員会」については、前掲拙著、二五一一―二五七頁。
- (39) 首相候補に最も近かった位置から傍流に追いやられていく過程のカルロ・シュミットについては、Petra Weber, *Carlo Schmid*, München, 1996, S.631-645.
- (40) Daniel Munkel, Einleitung, in: *Berliner Ausgabe*, Bd.4, S.35-36.
- (41) Sitzung des Parteivorstandes am 29. Januar 1960, Bl.1, SPD-Parteivorstand Protokolle, Archiv der sozialen Demokratie in Bonn (AdSD).
- (42) Ebenda, Bl.2, AdSD.
- (43) Brandt, *Erinnerungen*, S.33.
- (44) Schreiben des Regierenden Bürgermeisters von Berlin, Brandt, an den ehemaligen militärischen Berater des SPD-Parteivorstands und der Bundestagsfraktion, Beermann, 16. Juli 1959, in: *Berliner Ausgabe*, Bd.4, S.201.
- (45) ブラントの手足として動く側近グループを育てることができたのが、カルロ・シュミットとの違いの一つである。シュッツとノイパウアーに加え、一九五九年にハインリヒ・アルベルツが市政府官房長に呼ばれ、一九六〇年にエゴン・バールがスポークスマンになった。他方、ロイター時代からの助言者で古いタイプの党員は遠ざけられていった。Menseburger, *aa.O.*, S.384.
- (46) Munkel, Einleitung, in: *Berliner Ausgabe*, Bd.4, S.36. Hartmut Soell, *Fritz Erler - Eine politische Biographie*, Bd.1, Berlin/Bonn-Bad Godesberg, 1976, S.671.
- (47) Sitzung des Parteivorstandes am 19. Juli 1960, Bl.11, SPD-Parteivorstand Protokolle, AdSD.
- (48) Ebenda, Bl.1, AdSD.
- (49) この間のオレンハウアーの対応であるが、彼は誰を支持するか公の場で明言することはなかったが、カルロ・シュミットの方が好ましいと考えていた節はある。ヴェーナーを始め、ブラント支持を明確にした幹部に対しては決定を急ぐべきでないと述べていた。しかし、ブラント首相候補誕生に強く抵抗を続けた形跡もない。オレンハウアーはSPDの身元保証的な存在であり、彼なくしては、古い伝統主義的な党が一九五八年の党組織改革から翌年のゴードスベルク綱領制定を経て一九六〇年のブラント首相候補誕生まで、分裂や混乱なく変化することはなかったであろう。ブラントも、そのようなオレンハウアーの役割を評価していた(Brandt, *Erinnerungen*, S.32-33)。参考までにブラントは、一九六一年に入って連邦議会選挙後にはオレンハウアーから党首の座を奪うべきだとヴェーナーに迫られたが、それを断固拒否したというエピソードを披露している。彼によれば、これがヴェーナー

- この関係が変化していくきっかけであった。(Schöllgen, *a.a.O.*, S.112.)
- (50) Carlo Schmid, *Erinnerungen*, Bern/München/Wien, 1979, S.692.
- (51) 高橋進、前掲論文、八二頁。
- (52) Beatrix W. Bouvier, *Zwischen Godesberg und Großer Koalition*, Bonn, 1990, S.42-43. 一九六〇年一月二日、アデナウアー首相の西ベルリン市議会での演説、それに対するブランツの応答については Europa Archiv, Folge 3/1960, Z.1-2.
- (53) Bouvier, *a.a.O.*, S.49-51.
- (54) Ebenda, S.59. この「ミュールハイム六原則」は以下の通り。①ベルリンはドイツ連邦共和国に留まる。②ドイツ民族は決然としていかなる独裁にも反対し、西側共同体に与するものである。③責任を自覚した勢力は断固として共産主義とソ連のドイツ政策に反対する。④中部ドイツに住んでいる人々の運命は緩和されなければならない。ドイツ問題解決のための手がかりを得ようという努力はなおさらにされてはならない。⑤ヨーロッパはすでに東西に分裂しているので、それに加えて非共産主義のヨーロッパがまた分裂することはあってはならない。⑥安全保障の重要性にもかかわらず、平和の確保に貢献するため、あらゆる努力が払われなければならない。
- (55) Ebenda, S.60.
- (56) 前掲拙著、二四〇—二四五頁。
- (57) *Protokoll der Verhandlungen des Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands in Hannover: 21. bis 25. November 1960*, Hannover/Bonn, o.J., S.664.
- (58) Ebenda, S.678-679.
- (59) Ebenda, S.658.

〔付記〕本稿は、平成二二年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「西ドイツ『第二の建国期』におけるドイツ社会民主党の変容」による研究成果の一部である。

(やすの まさあき・広島大学教授)

